

令和5年度 県立長野図書館協議会（第1回）議事要録

1 日時

令和5年（2023年）9月27日（水） 午後1時30分～午後3時40分

2 場所

県立長野図書館 3階会議室

3 出席者

<委員（五十音順）>

渡邊匡一会長 大林晃美委員 春日由紀夫委員 田川圭子委員 田中一樹委員
西山卓郎委員 平賀研也委員 松山佳奈子委員 棟田聖子委員

<県立長野図書館>

森館長 関副館長兼総務企画課長 祖堅資料情報課長兼資料係長
白井課長補佐兼総務係長 篠田企画係長 犬浦情報係長 槌賀主査 干川主査
柳沢主任

<長野県教育委員会事務局 文化財・生涯学習課>

増尾企画幹兼課長補佐 小澤主査

<長野県教育委員会事務局 心の支援課> （会議事項ウのみ）

楠主任指導主事

4 会議次第

(1) 開 会

(2) 館長あいさつ

(3) 職員紹介

(4) 会議事項

ア 利用実績について

イ 県立図書館所蔵資料デジタル化事業の進捗状況について

ウ 子どもの居場所としての図書館の在り方について

エ その他

(6) 閉 会

5 会議の概要

(1) 館長あいさつ（要旨）

県立長野図書館は経営方針を「ミッション・ビジョン」として明文化し、従来からある課題やサービス毎の視点を越えて、情報の改革、場の革新、人の変革という3つの柱

で事業を推進しています。特に、「情報の改革」については、デジタルアーカイブや電子書籍といった、県内の自治体・館ごとの枠を越え、共有して活用できる情報基盤の構築・提供が進んでいます。そのうちの一つ、いつでも、だれでも、どこからでも使える、電子書籍サービスの「デジとしょ信州」がオープンして1年と2か月になりました。学校単位で利用IDを取得して英語の学習に使ったり、シニアの方向けの見守用タブレットに、デジとしょ信州を予めインストールしていただくなど、自治体特有の課題の解決に、うまく活用していただく事例が出てきています。新たに、視覚に障害をお持ちの方向けのサービスも始まりました。県全体の情報格差を解消したり、協働するための場づくりや、システム基盤の提供によって、市町村の図書館を下支えすることは、県立の役割として、とても重要だと考えています。

デジとしょ信州は、去年の夏のデジ田甲子園で入賞しましたが、今年度は、全国知事会優秀政策の（デジタル部門）で、第1位をいただきました。さらに、一般社団法人プラチナ構想ネットワークの賞についても、現在第二次審査に向けて準備中です。こうした、外部からの評価をいただけることは大変ありがたく、戦略的に予算確保に結び付けたいところです。ただ、本当に大切なのは、「じゃあ、どれくらい活用されているのか」「県民の皆さまの暮らしが、実際にどんなふうに良くなったのか」ということだと思います。そういったご議論をいただく前提として、前半は、図書館の利用統計と、地域資料の電子化・活用状況についてご報告し、ご意見をいただきたいと思います。後半は、「居場所としての図書館を考える」というテーマで、幅広く、皆さまからのご意見をいただきたいと思います。

(2) 利用実績について

資料1により祖堅資料情報課長説明

(3) 県立長野図書館所蔵資料デジタル化事業の進捗状況について

資料2により槌賀主査説明

(4) 子どもの居場所としての図書館の在り方について

資料3、7により森館長説明

資料4、5、6により楠主任指導主事説明

(5) その他

参考資料1、2により篠田企画係長から、全国公共図書館研究集会（児童・青少年部門）の内容説明、第73回長野県図書館大会の内容説明

参考資料3により柳沢主任から、夏休み期間に実施した「図書館攻略大作戦Ⅱ」の活動を紹介

(6) 委員との主な質疑応答、意見要望

ア 利用実績について

質 疑	応 答
こういう政策を打ってうまくいった、いかなかったか。こういう狙いがあったって効果を狙ったが、こういう結果になった。などがあれば、お聞きしたい。(西山)	一例として、資料1 p.12,13 の本の貸出の年齢層別・分類別シェアを見ると、一番多く児童書を借りているのは30代40代。お子さんなど、自分以外の人の本を借りる傾向と思われるが、「デジとしょ信州」では、30代40代が（おそらく自分のために）実用書を借りる傾向がある。電子書籍ならではの使い方と考えられるので、こうした強みを伸ばしていきたい。(館長)
しあわせ信州創造プラン2.0と照らし合わせたときの成果があれば教えてもらいたい。(田中)	プラン2.0の時は、レファレンスの件数をKPI(評価指標)としてあげていた。コロナ禍で直接来館ができなくなったことにより、当館はネットなどを使ったレファレンスは増えたが、全県的にみると、レファレンスの数字は落ち込んだ。プラン3.0に移行する際、何をKPIとすべきか検討した。レファレンスは、1件当たりにかかる時間が、件数が増えるごとに労力が増えていく。それよりも、1件当たりにかかる時間を工夫により減らす指標にしたいと考えた。結果的に、プラン3.0では電子書籍も含めた本の貸出数がKPIとなった。貸出数もさることながら、貸出人数も重要であると考えている。(館長)
知り合いの図書館長に「デジとしょ信州」の仕組みを紹介してみたら、良い取り組みと言われた。電子書籍は新しい図書館の在り方を方向づけていると思っているが、良さの周知は、裾野にまで下りていない。南信の図書館では、心理的・地理的にも遠く、上からの指示ととらえられている部分もある。長野県の図書館として利便性を考えるとの共通理解が広がっていけば、「デジとしょ信州」も進んでいくのではな	各地域に足を運ぶことは非常に重要なことだと考えており、今年度は、全県の図書館をめぐるプロジェクトを再開した。各地域の協議会等にも、継続的に参加させていただくようにしている。(館長) 今年は、飯田市立図書館で行われた飯田下伊那図書館協会総会に参加をさせていただいた。生の声を聴かせていただき、参考にさせていただいている。 各館訪問は、今年から3年かけて全県的に

いか。貸出数・資料提供が指標になるのが多いが、共通理解を促すためにも、南信まで足を運んで、図書館の抱えている課題なども聞いてもらいたい。(春日)	実施する予定。(干川)
郡単位の図書館へ出向いて話を聞いたり、双方向性のある研修などもあり、デジタル書籍の導入では全県的に話す場ができた。コロナ禍もあったが、ブロック単位での支援もこれから必要と思う。 西山委員の質問の回答にあったが 30 代 40 代のデジタルへのシフトは、大きな変化の兆し。県立図書館がどう見られて、どう使われるかを考える時期である。県立図書館の使われ方の明確な方向性を示したらどうか、変化の兆しをもっと生かして、例えば KinoDen の蓄積できる資料に注視するなど、紙ベースでの資料提供を減らしても、もっとデジタル化を推し進めて、お金のかけ方を考えることも必要なのではないか。(平賀)	現在は、紙の資料費を削って、デジタル化した資料提供に置き換えていくまでには至っていない。当面は、紙ベースでの資料提供プラスαでデジタル化の資料費を獲得する努力を継続することを基本にしていきたい。出版点数が、今はまだ紙媒体が圧倒的に多く、電子書籍が少ないからである。特に、公共図書館向けに提供してもらえる本は、更に少ない。今後、出版がデジタルにシフトしていく状況が、中期的にはくると思われる。その際には、切り替えていくことになると思う。 なお、地域資料の収集・保存・提供の話と、デジタルアーカイブ化の話が、今は館内でも一体的に考えるところまで行けていないので、現在検討中である。(館長)

イ 県立図書館所蔵資料デジタル化事業の進捗状況について

質 疑	応 答
アクセス数を Google の Analytics で見ているが、資料紹介は SNS が多いとか、他に多いものはわかるか (西山)	どのデバイスで使われているか PC、タブレット、スマホで使われているかもわかるようなので、それも含めて今後確認していく。(槌賀)
満足度調査の回答人数が 1 名ということだが、今後これをどのように増やしていくか? (田中)	ナレッジスクエアのフェイスブック、図書館のフェイスブックなど、機会を捉えて周知を図りたい。(槌賀)

- ・ 資料デジタル化の周知を地域に説明し、好評であったが、この取り組みを継続的にやっていただけるのか、子供や孫の代まで続けて見られるように担保して欲しい (春日)
- ・ デジタル化を始めて 5 年が経とうとしているので、次の段階にさらに進んでいかなければいけない。もう一つは、デジタル化の周知・発信を進めているが、コンテンツをいかに魅力的なものに作る人、編集できる人材を獲得できるかにもかかっている。(平賀)

ウ 子どもの居場所としての図書館の在り方について

- ・ 不登校という問題もあるが、長野県は20歳未満の自殺死亡率が高いとの報道もある。私に関わっている支援には、目に見えない相対的貧困家庭も増えているのではと感じている。低所得家庭の子の3人に1人が、学校外の体験活動が何もないという公益社団法人チャンス・フォー・チルドレンの行った全国調査の結果もある。そんな中で図書館という学校以外で活動が安全にできる場が確保できることは、とてもいいと思うし進めていってほしい。

ただ、不登校であるとか、支援が必要な子であるとか、ラベルを張られることで、支援から離れていってしまうこともあるので、進め方に検討・議論の余地はある。(西山)

- ・ 私の活動でNPO法人の顔としては、長野市で若者の居場所づくりをやっている、これは来月オープンする予定。今回、図書館としてどういう居場所づくりをしたいのかお聞きしたい。支援する場所なのか、交流する場所なのか、居場所の役割として大きくは2つに分かれると思う。支援を目的とした場合、人を配置しなければいけないと思うが、図書館運営の中で、人材をやり繰りして支援にあてることができるのか、県として、支援が必要な人が来た場合どのように担当課につなげていくのか。(田中)
- ・ どんな支援をするか、原因別に考えられると思う。貧困・虐待・ヤングケアラーなど、勉強以前の厚生の部分と、学校での人間関係・発達障害などによるコミュニケーションの部分、知的障害の境界で成績不振や、成績が良すぎて孤立し、周りに馴染めないなど、ある程度の原因に分けて支援していかないと、なんとなく支援では、有効でない。図書館としてかかわっていく時に、情報提供などならよいが、場合によってはカウンセリング機能や、研修を受けていなければ、児童等の若年者に対しては、かえって悪影響を及ぼす場合もあるのではないかな。有効な支援の方法を考えていかないといけないと思う。(田川)
- ・ 私の知り合いにずっと中間教室をやっている人がいて、その方が言っていたのは、中間教室に送ってしまえば、それでいいと思っているのか、以前に比べて教員が無関心になった。不登校は問題行動ではないと話があったが、つながりは必要で、無関心では困る。一例だが、コミュニティスクール・教室として公民館の図書館に通っていた子供がいたが、先生が図書館にきて勉強を教えていた。約6か月後には、一旦学校に行けるようになったが、再度調子が悪くなって、自宅にいる。図書館でコミュニティスクールをやったことは、その子と関係性の高い祖父母が、以前は、学校対応を批判していたが、その後にお聞きしたら、子供が自宅でやりたいことをやっていると話していた。図書館が連携し情報共有することはいいこと。ただ、図書館にずっといる子供に対して司書の心理的な負担になる場合もあった。(春日)

- ・ 伊那で地域の子供たちの居場所にかかわっているが、高校生が地域学習のなかで自分たちの居場所が欲しいと話があり、脇から支えながら、たき火など月1回程やっていて、集まったところに、不登校の子供もくるようになった。県の政策的な思惑と、リアルな場所でリアルな子供たちを相手にするのは全く別の話。本来どうあるべきかについて考えることはいいことだが、長野県の場合、バラバラに教育委員会とか、生涯学習の場でも考えるとかあるいは知事部局では学びの円卓会議だとか、対象の違う人を全県的な政策として検討しているかもしれないが、一言でいえば、子供の居場所となってしまうが、県として、いったいどう考えていくか。教育委員会は教育委員会で、県民文化部は県民文化部で検討。リアルな場所をつくって、リアルな子供たちが安心して積極的に関することは違う。県立図書館は、ラボを使って小さなコミュニティがたくさんできて、その中でつながりなおそうよ。その中に学びがあるよとの理念のもとにやっている。どうしたら、そういった子供たちが、つながるのか。

政策的に、きれいな言葉・事例紹介・プログラムは作れるかもしれないが、リアルにやってみること、県で深刻に向き合うべきだ。図書館としては、「デジとしょ信州」を使って、こんなことができるよねとか、ラボ使用して、ビブリオバトルなどの事業を使ったノウハウを共有していくこと、全県のノウハウをまとめていくとか。ラボでのやっていることを、ちょっとずつ、この分野に広げてみることでいいのではないかな。制度、政策ありきではないほうがよい。(平賀)

- ・ 居場所として常に図書館は開いているようにしているつもり。実際に、オンラインを使って図書館のなかで学習をしている小学生の子供も見受けられる。教育支援センターの先生が実際に生徒さんを連れて本を借りに来てくれることもある。一定の距離間を保って利用してもらっている。図書館には、色んな人が来ていて、対応に苦慮していることもある。発達障害など事情を抱えたまま大人になって、図書館しか居場所がない人もいる。利用者さん同士でトラブルになったり、職員とトラブルになったりしている。事情を抱えながら、社会に放り出されてしまったときに、図書館という場所があってよかったと思うが、図書館とすれば人材も必要だ。小学生・中学生・高校生の支援の場、居場所とする場合、今のまま距離感を保っている居場所であればいいが、もう一步踏み出すならば、人材もプログラムも必要で、お金もかけなければと日々思う。(大林)

- ・ 小さい村の図書館で、2009年に開館したが、それ以前は私自身が中学校図書館司書だったこともあり、子どもの顔はよく見知っていた。開館した当初、よく知っていた子が毎日図書館にきていたことがあった。当時は、今回配布されたような資料もなく、体制も整っていなかったが、図書館にいて出席扱いにしてもいいのではと話しあった経験がある。図書館は居場所であることを大事にしたいと思っている。そこに加えて、その子が図書館にいてを他者には言いたくない。本人がどこにいるかを周囲の大人が共有するこ

とは大切にしつつ、子どものプライバシーは守りたい。今回いただいた資料上にあるような立派な取り組みは、図書館員としては現状では手が出せないが、来館した子は受け入れたい。また、その子が図書館にいる事情を口に出して聞くべきではないと考えている。一例だが、現在毎日、図書館に来ている、あきらかに高校生らしい年齢の利用者がいるが、事情を聞かないことで、信頼してきてくれ、徐々にその子の状況がわかってきた。立派なプログラムもいいが、現場としては、ちょっと考えるところがある。(棟田)

- ・ 小学生の子育てをしているが、資料にある内容を聞くのは初めてで、「はばたき」の冊子の存在自体も知らなかった。子供が不登校になってから情報を取ったり、学校の先生に教えて頂いたりすると思うが、不登校の捉え方をもっと共通認識として知っていただければいいと思った。棟田委員がお話されていたが、図書館に来ることで、自然に大人を信頼できるようになったり、色んな大人と関わって徐々に学校に行ける可能性があるかもしれないと思った。居場所として図書館が提供されるのは、とてもいい場所の提供になると思うが、長野市のような大きな図書館は、利用者が大勢いて、実際に居場所として効果があがり役に立つのか疑問に思った。(松山)

- ・ 棟田委員から高校生のお話が出ていたが、大学生もほぼ同じ状況だ。卒業できず、留年・退学する学生が増えている。にも関わらず、国は「4年で卒業させないのは、大学の教育に問題がある」といつてくる。

日本の教育制度の限界が来ているのだと思う。学年ごとの達成ノルマを決めて、ついでこれなければ、切り落とすことを続けることは止めて、子どもそれぞれの学力の進捗状況に合わせて何年かけても良いというような抜本的見直しをしなくてはならないと思う。

どうにもならないところをどうにかしようと、「図書館」がでてきても、どんな役割が担えるのか。図書館は、小学生・中学生に特化してではなく、色んなグループのなかに、小学生も入るし、中学生も入ってくるというのが、本来の役割だろう。

今日伺った教育支援の問題は、何処で線引きしてどこまでできるか整理する必要がある。(渡邊)

- ・ 今日紹介させていただいたのは、一例である。館長と事前打合せで図書館での学習を出席扱いにすることも可能である旨を伝えたときに、「図書館には、なかなかそこは難しい」と言われて気が付いたが、出席扱いされることが大事ではなく、居場所として子供が安心していられる場所の提供が、もっと大事である。

まずは、子供たちが好きな図書館で、自分で興味あることに対して、聞きたいとなればいいが、そこまで生徒をお願いしますということではない。前提として、居場所機能としてご協力を頂ければと思っており、教育支援についてぜひお願いしますということではない。

以前、公民館を担当していたこともあるが、公民館の館長さんに、不登校のお子さんたちをお願いしますということではなく、公民館の館長さんの中で、居場所機能として貸せるのではないかと、動いていただいている。皆さんでまずできることを考えていただく。昨年、コミュニティスクールも担当していたが、学校同士の情報共有や先生たちも足を運ぶこと、その場に行って子供の様子を見てくることが大事と思っている。(楠)

- ・ 皆さまのご意見を伺っていて、改めて、図書館にはリアルな居場所の機能として、二種類あると思った。一つは、避難所的な居場所(匿名で、目的がなくても安心して居られる)、もう一つは、知的好奇心が刺激される居場所(興味関心が向いたときに、本やいろいろなプログラム、さまざまな年代の人たちとの接点がある)。それに加え、いつでも、どこからでもアクセスできるデジタルコンテンツの提供が始まったことで、図書館以外のさまざまな居場所でも、図書館のコンテンツを活用してもらえる可能性が広がってきた。

政策は、予算の獲得との兼ね合いで必要なことではあるが、それありきではないと思う。また、図書館には図書館の強みがあり、何でもできるわけではない。さまざまな現場の方たちとよくよくコミュニケーションを取り、図書館だからこそできることを模索していきたいと考えている。引き続き、ご相談しながら進めていきたい。

本日は、ありがとうございました。(館長)

6 その他

- ・ 会議終了後、「信州・学び創造ラボ」で委員と職員の懇談を行った。